

山上臣憶良七夕歌十二首  
 天の川 相向き立ちて 我が恋ひし 君来ますなり  
 紐解き設けな(8・一五二八)  
 右、養老八年七月七日、令に応ふ。  
 ひさかたの 天の川に 舟浮けて 今夜か君が 我が  
 り来ますむ(8・一五一九)  
 右、神亀元年七月七日の夜に、左大臣の宅にし  
 て。  
 牽牛は 織女と 天地の 別れし時ゆ いなうしろ  
 川に向き立ち 思ふそら 安けなくに 嘆くそら 安  
 けなくに 青波に 望みは絶えぬ 白雲に 涙は尽き  
 ぬ かくのみや 息づき居らむ かくのみや 恋ひつ  
 つあらむ さ丹塗りの 小舟もがも 玉巻きの ま懼  
 もがも 朝なぎに いかき渡り 夕潮に い漕ぎ渡り  
 ひさかたの 天の川原に 天飛ぶや 領巾片敷きま  
 玉手の 玉手さし交へ 寝てしかも 秋にあらずとも  
 (8・一五二〇)  
 反歌  
 風雲は 二つの岸に 通へども 我が遠妻の 言そ通  
 はぬ(8・一五二二)  
 たぶてにも 投げ越しつべき 天の川 隔ればかも  
 あまたすべなき(8・一五二二)  
 右、天平元年七月七日の夜に、憶良、天の河を  
 仰ぎ観る。一に云はく、帥の家にして作る、といふ。  
 秋風の 吹きにし日より いつしかと 我が待ち恋ひ  
 し 君そ来ませる(8・一五二三)  
 天の川 いと川波は 立たねども さもらひ難し 近  
 きこの瀬を(8・一五二四)  
 袖振らば 見もかはしつべく 近けども 渡るすべな  
 し 秋にしあらねば(8・一五二五)  
 玉かぎる ほのかに見えて 別れなば もとなや恋ひ  
 む 逢ふ時までは(8・一五二六)  
 右、天平二年七月八日の夜に、帥の家に集会ふ。  
 牽牛し 妻迎へ舟 漕ぎ出らし 天の川原に 霧の立  
 てるは(8・一五二七)  
 震立つ 天の川原に 君待つと い行き反るに 裳の  
 裾濡れぬ(8・一五二八)  
 天の川 浮津の波音 騒くなり 我が待つ君し 舟出  
 すらしも(8・一五二九)

### はじめに

この、山上憶良の七夕歌については、これまで以下の二点が多く指摘されてきた。

- ①漢籍の影響が濃厚である。
- ②七夕歌として特徴がなく、平凡な作である。

### 話者による分類

憶良の牽牛歌を、話者にもとづいて分類すると、以下のように分けられる。

- 牽牛歌…一五二〇、一五二一、一五二二、一五二五
- 織女歌…一五一八、一五一九、一五二三、一五二六、一五二八、一五二九

### 時間による分類

憶良の七夕歌を、詠時に注目して分類すると、牽牛歌はいずれも当夜のもの、織女歌はいずれも非当夜のものになっている。

集中にまとまった数が載る人麻呂歌集七夕歌、作者未詳七夕歌、家持七夕歌の詠時をみれば、織女歌はいずれも一貫して当夜のものが多い。対して、牽牛歌は、作者未詳七夕歌に当夜のものが多い一方、人麻呂歌集七夕歌、家持七夕歌では約半数にとどまる。

憶良の織女歌は、詠時の点で他の七夕歌群と近い性質を持つ。だが、一貫して詠時を非当夜とする牽牛歌は、独特といえよう。

### 織女歌について

織女歌は、表現のうえで作者未詳七夕歌との類似性が指摘されるものが多い。

一例をあげれば、一五一八は、  
 天の川 川門に立ちて 我が恋ひし 君来ますなり 紐解き待たむ  
 (10・二〇四八)

と類歌関係にある。他にも、一五二八は10・二〇四五、10・二〇六八と類歌と違って差し支えないであろう。

### 牽牛歌について

牽牛歌は、表現のうえで、作者未詳七夕歌との類歌性が見出しがたい。

牽牛歌の中で特に目を引くのが、長反歌の漢籍を思わせる表現である。第七句「思ふそら」から第二六句「い漕ぎ渡り」までは対句の連続で、これは漢詩の特色から影響を受けたものであるとの指摘がなされてきた。また「青波」「白雲」の青と白の対比も、漢詩の影響であるといわれる。これほどに強く漢籍の影響を受けた表現は、憶良以前の七夕歌には見られない。

### まとめ

憶良の織女歌は表現、詠時の点から七夕歌の典型的な詠い方であるといえる。諸論が述べる平凡な作であるとの評は否定できない。対して、牽牛歌はその表現、詠時ともに作者未詳七夕歌とは異なるものである。決して平凡のひとつことでは片づけられない、挑戦的な作品といえよう。